

日本の絶望と

キリストの十字架

藤井 聡

日本に生まれ育ち、信仰心とでも呼ぶべき気分のもとに教会に訪れたり聖書をひもといたりした経験を一度も持ち合わせてはいない筆者には、どうひいき目に見ても自らにキリスト教についての十分な理解が備わっているようには思えない。それ故、筆者の様な者がキリスト教について何かを語ることに、ためらいの念が拭いがたくあることは事実である。しかしそれでもなお、平均的な一現代日本人としての知識と経験の範囲で、キリスト教についての思いを語り、文章として綴ってみせることには、決して小さくはない意味があるのではないかと、という思いが筆者にはある。

そうした思いは、一ヶ月前に、英国の大英博物館に訪れた時にふと去来したのであった。

周知の通り、大英博物館には大英帝国時代に世界中から略奪した金品財宝を中心に、実に様々なものが展示されている。それらはいずれも目を見張る立派な品々なのであるが、筆者にとって最も印象深く感じた展示物は、一つのキ

リストの十字架であった。

改めて説明するまでもなく、キリスト教の十字架は、イエス・キリストが処刑された姿を表すものであり、この二千年間、様々な時代と地域で、様々な形式の十字架が作られ続けてきた。大英博物館には、それら様々な十字架が展示されており、それらを時代別、地域別に眺めて歩くのは興味深い体験であったのだが、その中の一つに、筆者にとって実に印象深い十字架が展示されていたのであった。

その十字架を目にする以前には、筆者にとって、十字架なるものは、どうやらキリストが処刑された姿を表すものであるらしいという程度の印象をしか持ち合わせていなかった。しかし、その十字架を見た時に、これまでキリスト教の信者達が、十字架に重大な意味を付与し続けてきた理由の輪郭が理解できたように感じたのである。

詳しい時代などは忘れてしまったが、確かその十字架は、中世の欧州のゴシック様式のものであるとの説明書きがなされていたように思う。その十字架では、一人の痩せ細った男が磔（はりつけ）にされていた。手の甲の真ん中には、大きな杭が左右一本ずつ打ち付けられ、向しく足の甲にも大きな杭が打ち付けられている。胸は槍で突き刺され、そこからは血が噴き出している。全く素朴な感想ではあるが、その十字架

のキリスト像を見ながら、もしも我が身がこの様な形で磔られたならと思わずにはおれなかった。十字架に磔にされ、その体躯が杭のみで固定されているからには、我が身の体重が全て手と足の杭にかかることである。杭で足と手の甲を打ち抜かれただけでも相当な苦痛であるはずである。その上、その杭に全ての体重がかけられる状況とは、その苦痛なるものは想像を絶するもの、としか言いようがないものに違いない。筆者の目にとまったその一つの中世のゴシック様式の十字架は、筆者が目にしたどの十字架よりも、こうした想念を喚起させるに足る大きな存在感を誇っていたのであった。

その痛みに思いが至ったときに、十字架とはなんと不気味でグロテスクな像であろうかと感じずにはいらなかった。そのグロテスクさは、一歩間違えば、低俗な怪奇趣味の嗜好対象にさえ成り得るものとさえ思えた。しかし、そうした何とも「グロテスク」なる像を、最も「崇高」なる信仰の象徴とみなし続けてきたのが、キリスト教なのだ、という事実には、何とも言えぬ感慨を覚えたのであった。

ここでもし、キリスト教についての筆者の知識が、全く無かったとするなら、なぜキリスト教において、こうした「グロテスク」な十字架が信仰の対象となり得たのかという理由について、全く理解することが出来なかったに違いない。

ない。しかし、筆者はこの時、なぜこの瘦せ細った男、イエス・キリストがそこで磔にされたのかということ、ならびに、その後その男の身に何が起こったのかということについてのおおよその「物語」を、常識の範囲ではあるにせよ、理解していたすなわち神の子として生まれ、この世における最も神聖なる存在であったにもかかわらず、真や善や美を求める精神とはかけ離れた「腐臭を放つ「悪意」によって、拷問の後、十字架に磔となったのであった。しかし、イエス・キリストは、自らの預言通り、死の三日後に復活した——こうした物語の顛末を想起すれば、この「グロテスク」な十字架像が崇高なる信仰の対象とみなされてきたという事実を理解することは、それほど難しいことではないのではないかと思えた。

なぜなら、この十字架を、イエス・キリストの生涯から復活に至るまでの「物語」を踏まえつつ見つめることで、如何に人間がむごたらしく、醜い存在であるのかが、いと簡単に理解できるように感じたからである。その手と足に打ち込まれた杭の痛みを我が事として想像すれば、その状況のむごたらしさを理解することは容易い。しかも、そのむごたらしい状況に処せられているのは、この世における最上に神聖なる人物であったのである。人間は、そうした神聖なる人物の神聖さを理解しないばかりか、そ

の人物を憎み、拳げ句には、むごたらしい磔の刑に処したのである。その点を理解していれば、十字架を眺める度に、人間とは、如何にどうしようもなく、真や善や美に無頓着な、ちくでもない存在であるのかを容易に思い出すことができるのではないかと思えたのである。事実、大英博物館にて、その十字架を見つめながら、筆者は、人間の本質的などどうしようも無さに（おそらく、キリスト教では、「人間の原罪の罪深さに」と言つべきなのであろう）、絶望的な気分

に苛まれたのであった。しかし、イエス・キリストの物語は、磔に処せられて、終わるのでは無い。あるうことが、イエス・キリストは、死後三日後に常識では理解しがたい奇跡、すなわち、「復活」を遂げたのである。大英博物館の中で、十字架を見つめながら、その事実に思い至ったとき、人間の「原罪」についての絶望感の大きさに比例するだけの「希望」の思いが、我が眼前にもたらされた気がしたのである。

つまり、キリストの物語を踏まえながら十字架を見つめる度に、人間とは原理的にどうしようも無い（罪深い）存在であるという絶望感と、それにも関わらずそのどうしようも無さを奇跡的に乗り越えることが可能であるという「希望」の双方を、あらん限りの最大の想像力をもってして繰り返し思い出すことができるのである。

しかも、それはあくまでも「想像」であるが故に、白々新たな気持ちで眺めることで、絶望と希望の双方を、白々深化させていくことが可能となるのである。十字架とは、そうした日々の精神の営みを手助けする一つの装置として機能するものではないかろうか——。

筆者は、大英博物館の十字架を見つめながら感じた以上に述べたような希望と絶望を巡る論考を、あるいは、その際の「気分」を、それ以降、時折思い起こすようになった。日々の仕事や公共の空間の中で、「どうしようも無い（罪深い）人々」を目にした時に、あるいは、白常のニースを聞き、現代が如何に「どうしようも無い（罪深い）人々」に占拠されているかを見せつけられた時に、その気分がしばしば我が身に訪れることとなったのである。そうした時には、十字架を前に感じた絶望感と質的に同一の絶望感が現実的に、具体的に訪れる事となる。しかし、その絶望感が十字架を前に我が身に去来したものと質的に同一であるが故に、その絶望感と同時に、その絶望の大きさに見合う大きさの「希望」の気配を感じることもあったのである。なぜなら、十字架を前に浸った気分とは、絶望と希望が一体となった気分であったからである。

無論、その希望の気配が幻想や思い過ごしである可能性を論理的に否定することなど出来はし

ない。なぜなら、絶望の大きさが大きければ大きいほど、イエス・キリストの物語が暗示するよつに、その絶望を希望に転ずるには、全ての論理を超越した「奇跡」しかあり得ぬものであるよつに違いないからである。

現代の日本、とりわけ、戦後の日本を覆う絶望は、計り知れぬ程深いものであるよつに思える。しかし、イエス・キリストの様な聖なる存在が十字架に磔にされざるを得ないのがこの世なのだとするなら、その程度の絶望は、日本がこの世に存在している以上は予め想定されうる範囲の絶望なのだと言わねばならないであろう。そして、もしもイエス・キリストの復活の物語を心の底から信ずることができれば、現代の日本の状況は、完全なる絶望のただ中にあるわけではないと信ずることもまた容易くできることであろう。それを「信仰」と呼ぶとするのなら、その信仰は、筆者が大英博物館で感じた「気分」とどこかで繋がっているものなのではないかと筆者には思えるのである。その気分、すなわち、希望の「気分」が我が日本の人々の精神の中に少しずつ醸成され、共有されることのできたのなら、その希望は現実へと、必然的に繋がっていくことであろう。

しかし、もしも本当に我々の精神が絶望に完全に支配されたとしたなら—— 享樂的に生きることを是としない限り、我々は生きていく

よすがの全てを完全に失う事となるだろう。キエルケゴールが指摘するよつに「絶望」こそが、「死に至る病」なのである。